

・・・はしがりぎ・・・

白ちょうの学校

日本白鳥の会会長 家田三郎

日本児童ペンクラブ、朝日学生新聞社が白鳥少年文学賞を作り今年で4回目、その作品集を見せてもらったが、韓国からも投稿があったり、去年は印度、西欧からもあったらしい。こうした少年の賞というものがいろいろあって、少年たちも大変だともきかされたが、白鳥というものが日本で取り上げられたのは終戦後のように思われてならない。それも瓢湖の故吉川重三郎氏の業績からの出発と考えたい。

私はこの作品集の中で出雲の小学校の「かわしま みか」という1年生の作った詩のような物に教示を得た。

「白ちょうの学校」というものなのだが、学校という考え方、私は瓢湖で20年も白鳥を見てきたが、一度も学校という思いを得なかった。「いたり、きたりして、ひっこしするのね」そういうのが白鳥の学校だったのだ。この学校という考え方は、もしかしたら、今の小学校の子供たちに頭から離れぬように、しみこまされているようにも思ったが、しかし、学校という見方に「そうであったのか」という思いをいだいた。

「たいいく」「こくご」などの時間にも思いがはせられていて、「おんがく」は「まねっこあそびをうたう。」さて、さく文の時間はあるのだろうか。「さく文をかくかわりに、こえていうね」であった。

私がここで、柳田国男の口承ということに思いついたのは私のてらいということになるが、その昔、日本の國に白鳥が来てから、ようやく、この30年ばかりの間に「白鳥の言葉」が、われわれにわかりかけてきたのではないかとさえ思われてきた。

白鳥の啼くばかりなる星明り